

**SHIMIN PRESS** の  
バックナンバーは  
インターネットで  
ご覧頂けます。  
**WEB SHIMIN**  
http://www.shimin.info

# SHIMIN PRESS

## 市民プレス：第10号

2003年07月01日  
(隔月刊、無料配布)  
発行人 特定非営利活動法人  
「市民フォーラム」  
編集人 原 昭 二  
制作・印刷 デジタル工房  
F A X 048-476-9111  
〒353-0004  
埼玉県志木市本町5-18-24

### 地方財政を二十%削減 地方への補助金削減と 税源移譲の方針決まる

地方税財政の「三味一体」の改革は、小泉首相の最終的な裁断によってようやく決着した。国の財政が落ち込むとき、国から地方への補助金を削減し、地方交付税を見直す代わりに、税を地方に移譲するという三つを同時に改革しようというものだ。

国から地方への補助金は一般会計で十七兆四千億円あまり、特別会計を含めると二十兆四千億円にのぼるが、今回の合意した案では、公共事業向けを含めて、その二割を三年間で削減するというもの。一方国から地方への税源の移譲については、所得税や消費税などの基幹税も対象とする方針だ。税源移譲の規模は、小泉首相の裁断で義務的経費の削減分については、その全額相当、その他の経費については、八割するということだ。

この改革は、昨年六月の閣議で決定された「骨太の方針」第二弾の柱として盛り込まれたもの。一年以内という期限付きで検討が始まり、小泉首相の二つの諮問機関、地方制度調査会(諸井慶会長)、地方分権改革推進会議(西室泰三議長)は、鋭意審議に当たってきたが、改革案の作成に手間取り、また関連する省庁の利害がからんで、議論は迷走した。

二つの対立する意見は、地方分権を優先するか、あるいは財政を重視するか、にある。分権派はこういう。地方が自由に使える財源を増やせば、地域の実情に応じたサービスができ、新しいものへの挑戦が始まれば、経済を活性化して、

引いては国の経済にも寄与する。他方財政派はいう。現在の国の税収は落ち込み、高齢化による社会保障の負担は増加する。自治体間の財政力の格差も広がる。そこで税の移譲は慎重に、決して急いではいられないと主張する。

改革案はようやくスタートしたが、具体的な数値目標はまた示されず、今後の政局によっては、実施まで手取取れることも予想される。政界、中央、地方の官僚をはじめ、地方自治体などからも多くの意見が出されることは間違いない。その行方を注視しながら、地方分権の確立と地方財政の真剣な改革について考えよう。市民も積極的に意見を発信すべきだ。

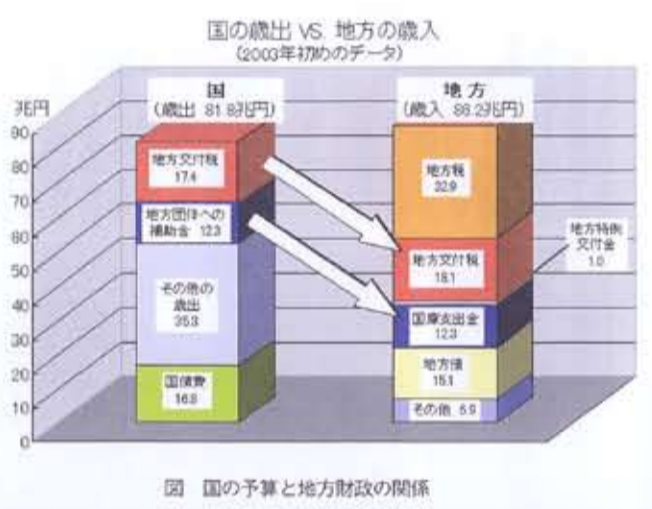


図 国の予算と地方財政の関係

志木市には、地主から借用して開設した「ふれあいの森」がいくつか設けられている。「エコシティ志木」などのグループがサポートしている。市民には好評である。敷地が道路より高いので、段差ができるが、バリアフリーでなくてはならない。しかしコンクリートで打つようなものではなく、環境にやさしい設計にしたい。かつて敷地が接していた「野火止用水」の面影が偲ばれるような設計はないか、などなど。

セキユリテイラインの線引き、マンション居住者との調整は、残された大きな課題である。しかしこれ



写真は寮跡地の開発はいま、貴重な斜面林を望む。ほぼ中央に、移植された大きなシンボルだった大銀杏が見える。

### 放置自転車を一掃したい... という行政の願い 市民はどう受け止める?

志木市、新座市では、志木駅の東口、南口付近の路上に放置される自転車に手を焼いている。これまで両市では、市営の無料、有料駐輪場を駅周辺につくり、あるいは私営駐輪場の利用を呼び掛けてきた。しかし路上駐輪車が減少する傾向は一向に見られない。そこで一斉に「強制撤去」する手段がとられてきた。大量の駐輪の列が目に見えるようになってきたのだ。

ある日、予言を知ったか知らずか、路上に駐輪した自転車を、運搬車両に山積みにして強制的に撤去する。この非情な光景を目のあたりにした方は、一体どんな感想をもたれたのだろうか。当然の成り行きと取られるだろうか。自転車で駅付近に買物に来て、お店の近くの路上に駐輪したところ、買物が済んで取りにきたら自転車が撤去された。あるいは通勤通学のために時間が無くてつい駅前に駐輪したが、夕刻志木駅に降り立って、自分の自転車が撤去されたことに気付いた。止むを得なかったと自分言に聞かせて、後日収容場所に出向く、納付金を払って自分の愛車を引き取ることになる。

過日、志木市ダイエーの前、柳瀬川駅前で徹底的な強制撤去が行われる。そのとき放置自転車は一掃された。しかし翌日には、ダイエー、ららぽーと前の市道などに、何時もと変わらず新しい放置自転車の列ができ上がった。まさにいたちごっここの感は深いのである。強制撤去は業者への委託で行われ、撤去された自転車と原動機付きバイクは、指定の場所に保管され、これを引き取る場合、両市では、自転車二千円、バイク三千円を徴収して持ち主に返却する。わずかな収入は焼け石に水、市の財政に撤去は大きな負担となる。

志木市では、ワーキンググループを立ち上げて根本的な解決を探ろうとしている。解決策を考えるため、防災交通、都市整備課のほかにも、教育委員会、福祉担当者を加え、商店、スーパーなどからの参加を求め、罰則の導入も検討するという。取締りの強化や罰則のみならず、また掛け声に終わらず、啓蒙だけに止らず、また個人のエゴだけを断罪することなく、市民の利便をも充分考慮した方向で議論を展開されよう関係者に求めたい。

志木駅東口の駐輪、駐車をカメラの目で見ると

写真1 自転車の荷台の中に、市の委託を受けて扱われた「放置自転車」の一掃に「協力」するという行政の啓蒙のための「ちらし」を見て、「これなに？」といふがる高校生。ダイエー志木店前の路上で

写真2 志木駅前「丸井」の前の広場は、志木市が所有している。その地下一階に市営の駐輪場がある。入口、出口はスロープになっているが、バイクを押して出入することは容易ではない。入口に受付があり、料金五百円を払う。月極めは自転車千八百円、バイク三千円(学割あり)。ただし取材に赴いたとき月極めは満杯であった。

写真3 地下につくられた駐輪場は、地上とは打って変わった光景だ。自転車二千台、バイク二百台の規模をもつ。

写真4 市営の駐輪場の上部は、バスが発着、タクシーの乗り場になっている。昼間は客待ちのタクシーとその運転手の姿だけが目に入ってくる。

写真5 志木駅南口、新座市の「ほっとくらさ」前の広場では、タクシーが待機する際のスペースにバスなどの発着にも使われる。新座市営の有料駐輪場で、さらに自転車の放置に対しては、常時五人の監視員が目を光らせていて、撤去に注意し、指導するという厳格さだ。



写真6 志木駅南口、新座市の「ほっとくらさ」前の広場では、タクシーが待機する際のスペースにバスなどの発着にも使われる。新座市営の有料駐輪場で、さらに自転車の放置に対しては、常時五人の監視員が目を光らせていて、撤去に注意し、指導するという厳格さだ。



その⑨

# 変貌する朝霞駅前 戦時下の「被服廠」

軍事施設の一つ、「被服廠」が赤羽(東京都)から朝霞駅前に移転してきたのは、昭和十六年(一九四一)のことだった。昭和六年に「満州事変」が起り、これを契機として軍人の独走が始まった。昭和十二年(一九二七)には日中戦争が勃発、国全体が戦時の体制になってゆき、ついに四年後の昭和十六年には、太平洋戦争に突入した。

## 「被服廠」とは

被服廠(ひふくしょう)は、軍人が身につける軍服、靴、鉄兜などをつくる施設のこと。戦争の拡大と共に本廠が手狭になったため、被服廠の分廠をつくることになり、東京近郊の朝霞に白羽の矢が立った。その敷地は、現在の市役所庁舎の南側から旧道新座・和光線(川越街道)に至る、十七万坪に及ぶ広大な土地であった。

## 敗戦によって跡地は

敗戦によって被服廠の跡地は、隣接していた、より広大な陸軍予科士官学校の敷地とともに、米軍に接収される。一帯は「キャンプドレーク」と呼ばれ、被服廠の跡地は「ブリスキャンプ」となった。戦時中に



キャンプ朝霞略図(昭和49年8月29日付『毎日新聞』の発表より)

は、朝霞駅の手前から分岐した線路が引かれ、被服廠内に製成品や材料を輸送していたが、接収されてからも、米軍の専用列車は基地内に直接入った。また朝鮮戦争の出兵にも使われた。キャンプ朝霞はアメリカ軍の極東の基地の一つとなり、昭和四十年(一九六五)ころ、ベトナム戦争のさいには、ノースキャンプ内に野戦病院が建設され、傷病兵を運ぶヘリコプターが絶え間なく発着した。

このころから市民団体によって基地返還を要求する運動が盛り上がり、昭和四十九年日米政府間の協議によって、一部の地域を除く大部分のキャンプ地の返還が決まった。それより前、昭和二十九年には基地の一部が返還され、いまの市庁舎の場所、川越高校定時制の校舎が建設されたが、昭和四十二年朝霞町は市制を施行し、四十七年には新市庁舎で業務を開始、返還された土地の一角に中央公園、総合体育館、図書館などを建設した。県及び国に返還された部分を含めて、この地域は大きな変貌を遂げた。

## 過去に遡ると...

いま朝霞駅前は一等地となっているが、昔はどうかあったか。歴史を振り返ってみよう。古く江戸時代、この辺一帯は広沢の原と言われ、かやの野原、雑木林が続いていた。この光景を偲ぶさすがはまったく無い。

## 大正三年に 東武東上線開通

東上線に「勝折駅」ができたが、「二、三軒の商店のほかには見るべきものは無かった。村役場は勝折の乗院の敷地を借りて執務していた。昭和七年には勝折村が朝霞町となり、町役場が新築されたが、その頃は畑の中にボツと役場が建つ静かな農村だった。ようやく駅前通りがつくられ、町役場はいまの市役所が新築されてから、保険センターになっている。

## 用地の取得始まる

日中戦争、太平洋戦争と続く農村では、男子は兵隊にとられ、農業に携わるのは女子と老人のみで、小学生までが、勤労奉仕隊を組織して農家の手伝いをした。田や畑を耕す人はいなくなり、雑木林を掃いて堆肥をつくる人もいなくなつて、荒れ果てた。

誰かが困っていたとき、政府の指令を受けた人々が、留守を守る女性や老人、子供の家を訪れ、被服廠の用地としての農地を買い占めていった。印鑑をもって役場に集められ、政府の方針であると説明して、農地の譲渡を強制した。「一坪当り一円五十銭で印を押させられた」そうである。長年耕作に当たつて

きた地主の関係者は、その頃を思い出し、いまも無念の想いに駆られている。幸いに戦争から帰還できた農家の男性も、ふたたび農業に就くことができなかった。落胆した。

## あの頃の光景は

被服廠があったころ、朝霞駅を降りると、畑の向うに町役場があり、その前は、竹矢来の垣根が気が遠くなるほど長く長く続き、中には、被服廠の建物の他、多数のシートをかけた荷物の山が積まれていた。その先、いまの緑ヶ丘には、被服廠に勤めていた軍属の住宅が並んでいた。

## また旧道保谷・志木線に沿った朝霞市下の原から志木駅にかけての雑木林(現在では倉庫、大型店舗が並んでいて、当時の趣きはまったく無い)には、軍需物資が野積みされていた。

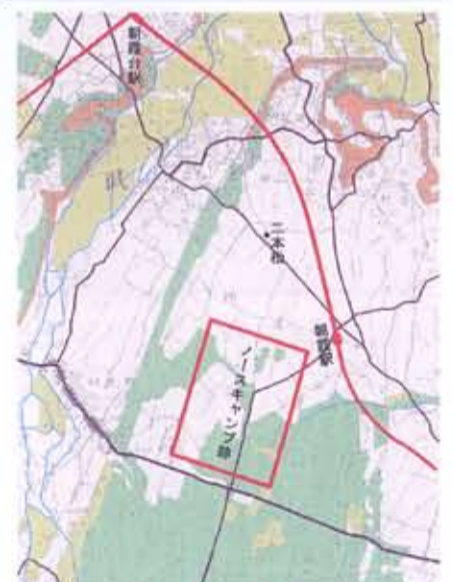
戦後敷地内に積まれていた物資は、米軍の進駐に備え、近くの農家の納屋に移されたが、終戦直後は無政府状態となり、混乱に乗じてこれらの物資を夜中に盗む人々の影は絶えなかった。滅茶滅茶な、そして浅ましい光景だった。

これまでの記述には、金子 真氏のつぎの資料を使わせて戴いた。  
1. 明治二十年に出版された参謀本部陸軍測量局の白地図を一部着色、鉄道などを加入(左)  
2. 航空写真(昭和58年11月13日撮影) / 空から見た埼玉28市、日本交通公社出版事業局、昭和59年発行(左端)

また旧道保谷・志木線に沿った朝霞市下の原から志木駅にかけての雑木林(現在では倉庫、大型店舗が並んでいて、当時の趣きはまったく無い)には、軍需物資が野積みされていた。戦後敷地内に積まれていた物資は、米軍の進駐に備え、近くの農家の納屋に移されたが、終戦直後は無政府状態となり、混乱に乗じてこれらの物資を夜中に盗む人々の影は絶えなかった。滅茶滅茶な、そして浅ましい光景だった。



「徴用工員始末記」より  
返還間近の高架水溝付近(左) 威容をほこっていた倉庫の一部(右)



いまの朝霞駅前(下段中央二枚) かつての被服廠の西門に向かう場はいま。「朝霞西高校」のフェンス(下段右端) かつての被服廠、ノースキャンプ正面ゲートの方向を旧川越街道から望む。右側に中央公園、左は保険所、朝霞市役所に向かって(左) 二本松の碑、いま(下段・左端)



### 徴用と徴兵

戦時下には徴兵制度があったので、男子は二十歳になると検査を受け、健康であれば有無を言わず徴兵された。ところが戦争が拡大し、非軍人をも軍備に巻き込んでいった。二十歳以下の若い男女を徴用し、軍需工場などで働かせた。当時の被服廠の作業は、徴用工員の手で行われたのである。

### 徴用工の体験を語る

以下の体験記は、星野伊三郎氏の著書「徴用工員始末記」をテキストとして記したものである。

昭和十七年(一九四二)三月、この朝霧駅前は、埼玉県のほか、栃木、茨城、福島、岩手、青森の各地から徴用された若者と、これを見送る家族、友人でこった返した。徴用令状を受け取った星野さんはそのとき十八歳だった。

### いよいよ入廠

今日のようなバスではなく、母衣(ほろ)付きの貨物の輸送車がお迎えとして使われた。この自動車は駅前を出て、駅前通りを直進、万年扉(上部には有刺鉄線が張ってあって、進入、脱走を防止していたようだ)に沿って西に進む。数米の松が所々に根を張って立ち、練兵場(軍事演習



用の敷地)を思わせる外観をもった広々とした被服廠の敷地には、大小さまざまな建物が並んでいた。

二キロメートルほどゆくと西門、ここが「守衛所」で、面会も外出も一切断ち切られるので、徴用工員にとっては、まさしく恨みの門であった。いまだ工事半ばの砂利道を通って廠内に入るとき、今来た道を振り返ると、黄色い砂塵が舞い上がっていた。

### 点呼で始まる寄宿生活

「起床っ！」「起床っ！」まだ明けきらぬ五時二十分、興奮と緊張の連続で眠られぬ夜の夢が破られた。入廠一日目の朝がきた。後日ラッパ手が養成されてラッパとなった。

洗面所は、トタン張りの流しに蛇口が二十個位付いていた。「点呼整列っ！」一寮百名、六寮六百名が奇宿舍前の道路に整列した。

六時三十分日朝点呼。管内職というのが足に合っていない。「一日直士官殿に敬礼っ。頭右っ！」

この日は伊達大尉(あとで聞くと、奥州伊達家の後裔で、男爵の伊達重郎だった)。「紅白縞模様のたすき、白手袋、赤い長靴、長めの軍刀を腰に、きゅっと角の立った赤い軍帽。誠に威風堂々の将校だった。

次第に戦争は激しさを増し、米軍機の本土襲撃は本格化してきた。廠内も緊張感が高まり、工員としての作業はもとより、同時に軍事教練や、防空壕の設置も

忙しく、徴友のうち、徴兵される者、かつての満州(現中国)の施設への転勤者がつきつきと現われた。星野さんも、それから二年半の間廠内で寄宿生活を送ったあと徴兵され、野戦車砲兵隊に入営、軍隊生活を体験することになった。

「徴用工員始末記」には、星野さんの青春が率直に語られている。被服廠で過された方々の体験は、当事者の思い出としてだけではなく、掛け替えの無い記録として、のちに残すべきものだ。忘却の彼方に追いついてはならない。



「徴用工員始末記」より表紙。昭和十七年入廠して職場に配置される直前のこと、倉庫から倉庫へ編上靴の梱包を運ぶ、忘れ難く辛かった肩の痛み。絵は星野氏の著書から転載させて載せた。上から、昭和十七年三月、入廠の日、朝霧駅頭/西門と第一第二寄宿舎/第一寄宿舎前、日朝点呼/右は金(かね)の茶碗に金の著/左は監督付きの入浴。

### 夏の夜空を彩る花火

志木市の花火は荒川の河川敷。羽倉橋のそばで、七月二十六日(土)、七時半から九時。名物「尺玉をはじめ、打上五千発。主催は「志木市観光協会」志木市役所内。

東京の隅田川の花火は、歴史と規模で筆頭に挙げられる。打ち上げ数約二万発。今年は同じく七月二十六日(土)。第一会場(言問橋の上流)は七時十分から八時半まで。第二会場(駒形橋の下流)は七時半から八時半まで。

江戸開府四百年に当たり、当時の花火を再現して、江戸情緒が味わえると。地下鉄「浅草」下車徒歩約五分。小雨決行。荒天のときは、翌日に延期。問い合わせは「花火大会実行委員会」TEL/03-5246-1111

写真は、川と花火。羽根倉橋の上流荒川畔から都心を望遠。撮影 小暮 正吉氏



## 大地 礼賛

### 台地を流れて 進める水

### 「新河岸川水系水環境運 絶会」の活動

柳瀬川、黒目川、白子川をはじめ、幾つもの河川の水は武蔵野の台地を流れ、注ぐ。この水は、さらに荒川と合流して東京湾へと向う。

この流域に住んで水と緑のまちづくりに関心をもち、活動しはじめた。その市民グループがある。

環境の調査を始め、平成六年(一九九四)、この活動は互いにネットワーク化され、平成十一年には「新河岸川水系水環境連絡会」の名称で、組織的な活動の輪をつくりあげた。この会は、東京北多摩、埼玉南部の市民団体、生活クラブを核として、自主的に参加した小、中、高校の先生と生徒を加え、五十団体を越えるまでに成長した。

新河岸川の水は荒川、多摩川、そして利根川とも繋がる。代表的な水の水を集められ、複雑に繋がっている。川の水の調査は、まず観測地点を決め、水質の分析を一齐に行ない、そのデータを集約、整理することから始まる。身近な川の組織的な調査結果によって、私たちの住む環境を保持、改善しようとするものである。調査は、生息する魚類、河川形態、河床、河畔の状況、地形、地質を含まみ、科学的なところをも養おうとするものだ。

一方、狭山丘陵から流れ出ていた柳瀬川の上流は堰止められ、多摩湖、狭山湖となり、多摩川の羽村取水堰から引き入れた東京都の水道用水の貯水池となった。その下からわずかに漏れ出した水が、現在の柳瀬川の源流になっている。平成五十年も前から、野火止用水として新座市を流れて、志木の市街を通って新河岸川に注いでいた水も、同じく羽村堰から分水された多摩川の水だった。現在、柳瀬川には新座と清瀬の境界付近にある東京都の下水処理場からの排水が、大量に流れているが、この水も、元をたどれば多摩川の水だ。

いまの荒川は、昔は人間川だった。三百七十年前には越谷方向に向けて流れていた荒川(現在の元荒川)を、熊谷付近から人間川の支流につなぎかえたため、荒川には秩父からの水が流れるようになった。現在では、東京の水道水を賄うため、群馬県境の利根大堰から武蔵水路を通じて利根川の水が荒川に大量に流れ込んでいる。

新河岸川の水系には、このように、利根川、荒川、多摩川という関東の三つの

れが目立ってくる。黒目川の笹橋、妙音沢や、黒目川と合流する落合川の湧水の透明度は高い。

今度の調査で特筆すべきは、流域の天然河川(河畔林をもつ土の河川)の保全と復元の検討である。改修などの人為が加えられず、そのままの状態を保っている河川では、河畔林が発達し、生物の生息、移動の場となり、地域の風景を構成する要素としても掛け替えの無いものだ。天然河川の特徴・役割を明らかにして、保全に取り込むことは、今後の大きな課題となった。

参考資料  
1.「新河岸川系身近な川の調査報告書、2002」新河岸川水系水環境連絡会、朝霞市西弁財1-7-17、3F TEL/FAX 048-466-0916  
2.天田 眞・水と緑のまちづくり(1)、志木タイムス、第13号



上写真：黒目川の要所、妙音沢と流れ込む湧水

### キーワード

### バックアップ

コンピュータに親しんでいる方には説明を要しないが、本来は「後援、予備、支援、代替品」といった意味のことばである。コンピュータの事故に備え、ソフトウェアの複製体制をとること、一般的にはプログラムやデータの複製を作っておくことを指す。

コンピュータのハードは堅牢なのに、その中に入っているデータは脆い。しばしば壊れる。そのため情報技術者は、いま扱ったプログラムやデータを特に注意深く扱い、バックアップを取ることを怠らない。

パーソナル・コンピュータ(以下PCと省略)のワープロで作った文章は、まずハードディスクに保存されるが、このデータのバックアップに用いられるメディアとして使われたのは、主に「フロッピーディスク」(約1メガバイト)だった。しかしデジタルカメラが広く受け入れられ、よりデータ量の大きい映像データを扱うようになったため、バックアップ用メディアとしても、大容量のものが必要になってきた。

倍、650から700メガバイト、そして一枚の値段も数十円ないし百円となった。従来から、音楽のメディアとして普及してきたので、音のバックアップはもちろん、映像データのバックアップ用メディアとして、利便性の高いものになってきた。さらに都合の良いことには、どんなPCでも必ずCD-ROMドライブが付いており、いつでも、どこでも読める。いままでにも、大容量のメディアとして、MO(光磁気ディスク)があったが、保存にも、読み取りにも、専用のドライブを外付けしないと読めなかった。CD-Rは携帯に便利なメディア

### PC 初級講座

だ。ただし、PCがCD-Rを作成できるドライブを備えていることが、勿論必要条件で、これが付いていないときには、外付けのCD-Rドライブを別途購入しなければならない。価格は1万円ないし2万円といたるところだ。データの書き込みには、専用のソフトが必要だが、OS(Windows XP)のようなオペレーティングシステムに標準で組み込まれているものを利用するか、CD-Rドライブに添付されているものを使う。

ただしCD-Rはフロッピーディスクとは異なり、書き込みはできない。また過去、再度の利用はできないので、使い捨てである。書き込みができるメディアとしてCD-RW(Rewriteのこと)がある。またもっと大容量のバックアップには、DVDを使う。それらの手続きは、CD-Rとほぼ同様であるが、詳しくはつぎの機会に譲りたい。



写真はフラッシュメモリーを付けたノートPC

もう一つ紹介したいものに「フラッシュメモリー」がある。軽くて小さいメディアで、携帯には抜群のもの。市販されている製品の容量は、64、128、256、512メガバイトなどがあり、価格は3000円から25000円位、それ以上の容量のものもある。何より便利なのは、使っているPCにUSBのポートが付いていれば、これに差し込んで直ぐ使える。特別のドライブやソフトは不要なことだ。勿論書き込みができる。

最近文化庁が行った、読書についての世論調査によると、「まったく読書をしていない」と答えた人は全国平均で37%だった。地域差については、手軽に本が買えるが、通勤電車の中で気軽に本を開くことができるか、などの違いも考えられる。

### VOISUMI

### 「リテラシー教育」はこれだよのか?

「リテラシー教育」の意味を辞書で調べると、Literacy ability to read and write、「読み書き」の能力のことを指す。文盲であった古から、字を読む、書くは、教育の基幹であるが、読み書きの能力を備えることは、かつては地位の高さをもつものに限られていた。庶民がその教育に浴するようになったのは、「寺子屋」からである。明治時代に寺子屋は小学校になり、かなり高度のリテラシー教育が普及し、わが国の知的レベルは一層高く、その普及も急速に進んだ。

「リテラシー教育」の重きをもう一つ紹介したいものに「フラッシュメモリー」がある。軽くて小さいメディアで、携帯には抜群のもの。市販されている製品の容量は、64、128、256、512メガバイトなどがあり、価格は3000円から25000円位、それ以上の容量のものもある。何より便利なのは、使っているPCにUSBのポートが付いていれば、これに差し込んで直ぐ使える。特別のドライブやソフトは不要なことだ。勿論書き込みができる。

「リテラシー」の意味を辞書で調べると、Literacy ability to read and write、「読み書き」の能力のことを指す。文盲であった古から、字を読む、書くは、教育の基幹であるが、読み書きの能力を備えることは、かつては地位の高さをもつものに限られていた。庶民がその教育に浴するようになったのは、「寺子屋」からである。明治時代に寺子屋は小学校になり、かなり高度のリテラシー教育が普及し、わが国の知的レベルは一層高く、その普及も急速に進んだ。

### ウォッチング

下写真 1, 2  
木工の体験、木片で楽しく遊ぶ  
初雁木材の六月一日の感謝祭で、  
(朝霞市新町3-4-40)



このコラムおよび挿絵は、「エコシティ志木通信」第十二号より引用。絵は松本恭子さん

### わたしの残したい風景

### 生命のいずみ志木市「柏町ふれあいの森」

松本恭子

志木市における緑地スペースの中で、「地権者の協力により公開している緑地」として、屋敷林から連なる斜面林があります。斜面という地形が織りなす貴重な森林帯には、様々な動物植物が生息しており、まさに自然の宝庫といえると思えます。

「柏町ふれあいの森」は、神明神社の裏手にあたり、ここ大塚の地に古くから住む地権者の方の協力により、平成5年に保存区として指定されました。面積二、〇八〇平米の森は、ケヤキ・スギ・クサギ・ツバシ、ヒグラシへと声の主役が移りゆく、日が落ちた森は暗闇の世界です。

現在、子どもたちの交流の場として、この森をはじめとした市内にある緑地スペースの活用が始まっています。下草刈りや、自然観察会はすでに行なわれており、森が多く生き物にとつての生命のいずみであり続けるためにも、大切に保存してゆきたいと思うのです。

### 地域情報

### 特別展「志木今昔写真展」

6月21日(金)から8月17日(日)まで  
9:30AM~4:30PM 休館 毎週月曜日(但し7月21日は開館、22、23日は休館) 入場無料

志木市立郷土資料館にて(志木市中宗岡3-1-2)  
TEL/FAX 048-471-0537  
特別展のポスターから「大正十年ころの宗岡一里塚」(右)

### 「近代の朝霞」を紹介する常設展示

7月1日(火)から  
朝霞市朝霞館の「歴史分野の展示コーナー」にて  
9:00AM~5:00PM 休館 7月7日(月)・14日(月)・22日(火)・28日(月)・25日(館内整理日)  
(朝霞市岡2-7-22) TEL 048-469-2285



特定非営利活動法人 NPO「市民フォーラム」  
この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布します。  
編集担当 原宛にどうぞ  
TEL 090-300485502